

「山に登る」

長野県の総面積の八割を占める山。高山から低山まで美しくそびえる山々に魅せられ、幾度目かの登山ブームも相まって多くの人が山を訪れている。人はいつから山に登るようになったのだろうか。本号では、山行の原点から現代の登山に至るまでの歴史を振り返りつつ、なぜ人は山に登るのか、長野県特有の登山文化や教育、登山の楽しみから危険性など、「山に登る」ことについて考察してみたい。



山と日本人 信州の山岳 を事例に

菊地俊明

白馬村大出公園から望む残雪の白馬連山 撮影/佐々木信一

独断だが、六、七〇〇万人といわれる山岳愛好者が承知する著名岳人は、樫原恒、深田久弥、ウエストンらではなかるうか。いずれも明治中ほどから昭和中期にかけて活躍した方である。が、それ以前の山岳史をいかに承知か。
山は太古から存在した。人間も数十万年前からいた。彼らは山と海に生き残るすべを求めたが、その記録はない。日本人が山や同朋とのかかわりを記録したのは、八世紀に収録された日本書紀以来である。
近時は土木工事などをきっかけに、次々と古代の遺跡、遺物が発掘され、古代から人が奥山へ踏み入っていたことが明らかになった。石器、縄文、弥生、古墳時代を通じ、山国信州の人々は、山とのかかわりは深かった。

黒曜石は物語る

北八ヶ岳の天狗岳と根石岳の間に、目立たないピークだが冷山(二一九三m)がある。その直下に黒曜石の採掘跡があると聞いて、十五年ほど前、岳友の黒百合ヒュッテ経営の米川正利さんに案内を求めた。

麦草峠を越える茅野側の国道の標高約二一〇〇m地点から南へ、わずかの踏み跡を横断状に小一時間歩くと、大、小十余の黒曜石が



冷山の黒曜石

散在していた。大きい石で高さ三、四m。その石の間をくり抜き、採石したとみられる横溝が数カ所で確認できた(写真参照)。

はがすと鋭く、包丁や動物捕獲の矢尻に使われた黒曜石の利用は、一万余年前の縄文時代からとされる。伊豆や箱根などでも産するが、信州産は特に切れがよく、信州から二〇〇km前後

の地域に広まっていたようだ。大量に産出した中信高原の星養峠(長和町)は国史跡に指定され、和田峠の下諏訪町側もよく知られる。信州の住民は縄文期から八ヶ岳や中信高原の山々へ、沢沿いや尾根を利用して、登ったり、峠を越えて搬送していた証である。

茅野市南大塩の尖石遺跡は、縄文集落の第一

号として一九五二(昭和二七)年、国特別史跡に指定された。近くの富士見町では約一六〇戸の竪穴集落が発掘され、他にも大深山(川上村)など標高一三〇〇m前後の山地で、何カ所もの遺跡が確認されている。いずれも水に恵まれ、狩猟や山菜採りに適した場所である。

ただ、住居や衣服などが粗末な時代に、高冷